ISSN-0913-1906

阡陵

No. 25

関西大学考古学等資料室彙報
平成4年5月30日発行

「車輪石」（古墳時代）

目 次

舎衛城と調査予察…… 2
北アリゾナ博物館―ホピ族のカチーナ人形―…… 4
平成3年購入資料紹介―黒漆桐文蒔絵行器ほか―…… 6
南京・淳泥国王墓…… 8
大英博物館日本部門……10
平成3年度調査報告―宮城県の遺跡及び博物館施設―……12
平成3年度第2回「考古学入門講座」について……14

関西大学考古学等資料室
〒564 大阪府吹田市山手町3丁目3の35
Tel 06―388―1121（内線3341）

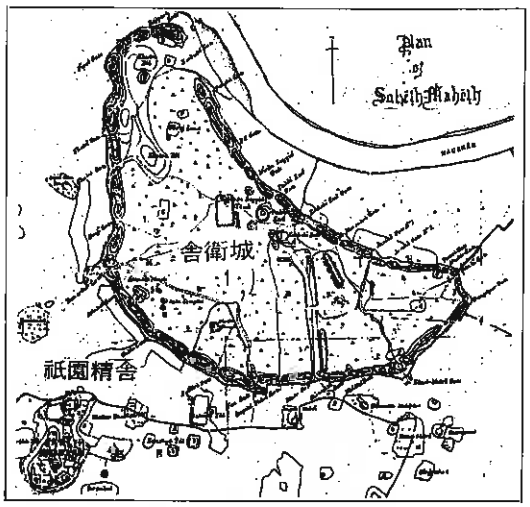
舎衛城と調査予察

網　干　善　教

平成３年度から文部省科学研究費補助金（国際学術研究）の交付をうけてインド国ウッタル＝プラデーシュ州、シュラーヴァスティ（Srāvasti）にあるサヘート（Sahēth）、マヘート（Mahēth）遺跡を中心とした調査を実施することになった。特に主目的とするのはマヘート遺跡である。この遺跡は漢訳仏典で「舎衛国（城）」とされるところの古代都市遺跡である。なお近接して所在するサヘート遺跡は「祇樹給孤独園」すなわち「祇園精舎」と称され、関西大学は100周年記念事業の一環としてインド政府考古調査局と共同し、昭和60年から63年度にかけて発掘調査を行い寺院跡、塔跡、沐浴池、広場などとそれを囲む諸施設及び多量の遺物を検出したところである。

舎衛城は世界史的にも著名なコーサラ国（Kosalā）の都城遺跡で遺存状況も良好である。遺跡はヒンドスタン平原の北部、ネパールとの国境に近いところにあり、ラプティ（Rapti）川の支流であったナウクハン（Naukhan）川の旧河道の右岸に接したところにあって三ケ月形の形態を示している。

都城跡は幅15mから30m位、高さ約10m～20mの土壘で囲まれ、その総長は約5.4km、面積にして約1.34平方粁ほどある。城内にはパッキ＝クティー（Pakki Kutī）とカッチー＝クティ（Kathchī Kutī）と称する建築遺構があって、日本人をはじめ多くの仏教徒や見学者の来訪がある。現在は南側のサヘート遺跡側より北進し、ソブナートゲート（Sobnāth Gate）より城内に入り、横断してパッキ＝クティー、カティー＝クティーに至っている。広大な都城跡内は今はその殆んどが灌木に覆われ、居住する家屋はない。



舎衛城と祇園精舎の位置図

この舎衛国はかつて「拘薩羅国」あるいは「室羅伐悉底国」と表記されていた。隆安３年(399)に長安を出発し、インド求法の旅に出た法顕はその記録である『高僧法顕伝』（『仏国記』ともいう）のなかで次の如く記している。

従此（沙祇大国＝Śaketa）南(北)行八由延。到拘薩羅国舎衛城。城内人民希曠都有

城壁土塁(左)とカイラ＝タル(Kaira-Tal)と調査予定地付近(中央の森)

二百余家。即波斯匿王（プラセーナジット＝Prasenajit・勝軍王・明光王の異名がある）所治城也。大愛道（マハープラジャーパティ＝Mahāprajāpati）故精舎処。須達長者（アナータピンデイカ＝Anāthapindika）井壁及鴦掘魔（アングリマーラ＝Aṅgulimāla）得道般泥洹焼身処。後人起塔皆在此城中。諸外道波羅門生嫉妬心欲毀壊之。

また、貞観元年（627）禁を侵して長安を出発し、天竺に向った求法僧玄奘は紀行『大唐西域記』のなかで次の如く述べている。

室羅伐悉底国。周六千余里。都城荒頓疆場無紀。宮城故基周二十余里。雖多荒圮。尚有居人。穀稼豊気序和。風俗淳質篤学好福。伽藍数百。圮壊良多。僧徒寡少学正量部。天祠百所。外道甚多。此則如来在世之時。鉢邏犀那恃多王〔原注。唐言勝軍。旧曰波斯匿訛略也（プラセーナジット王）。〕所治国都也。故宮城内有故基。勝軍王殿余趾也。次東不遠有一故基。上建小窣堵波（ストウパー＝Stupā）。昔勝軍王為如来所建大法堂也。

法堂側不遠故基。上有窣堵波。是仏姨母母鉢邏闍鉢底〔原注。唐言生主。旧云波闍波提訛也（プラジャーパティ）。〕苾芻尼精舎。勝軍王之所建立。次東窣堵波是蘇達多〔原注。唐言善施。旧曰須達訛也〕故宅也。善施長者宅側有大窣堵波。是鴦窶利摩羅〔原注。唐言指鬘。旧曰鴦掘摩羅訛也〕捨邪之処。鴦窶利摩者。室羅伐悉底之凶人也。作害生霊為暴城国。殺人取指冠首為鬘。将欲害母以充指数。世尊悲愍方行導化。遙見世尊竊自喜曰。我今生天必矣。先師有教遺言在茲。害仏殺母当生梵天。謂其母曰。老今且止。先当害彼大沙門。尋即杖劍往逆世尊。如来於是徐行而退。凶人指鬘疾駆不逮。世尊謂曰。何守鄙志捨善本激悪源。時指鬘聞誨悟所行非。因即帰命求入法中。精勤不怠證羅漢果。

こうした記録と伝説を想いながら舎衛城内を観察すると城内域は大別して3地区に分けられよう。1つは北辺のカイラ＝タル（Khaira Tal）と称する園池を中心とする地区で、王宮跡と考えられる。次は中央部でパッキー＝クティー、カッキー＝クティーなどのある地区である。

東地区は北側に西北―東南方向と南側に南北方向の幅約30m、高さ20m位、長さ各100mほどの土壘のようなものが残存する。この地域は旧市街地であろうか。市場のあったところという伝承もある。

舎衛城内での調査は1860年代にカニンガム卿（Sir. A. Cunningham）が踏査し、その後1907～8年にかけてホーゲル（J. Ph. Vogel）がパッキー＝クティ、カッチー＝クティの調査を行い、1959年にはシンハ（K.K. Sinha）が北側城壁の一部の発掘調査を行った程度である。

今回舎衛城内での主たる調査の対象と考えているのは北地区のカイラ＝タルの周辺の遺構である。西に面するカイラ＝ゲート（Khaira Gate）から北に大きく開くカルバラ＝ゲート（Karbala Gate）にかけての大規模なカイラ＝タルに面して北に向って張り出した舌状の平坦地があり、その先端に寺院、塔跡と思われるものがある。また、スーラジ＝クンド（Sūraj-Kund）と呼ばれる直経約35mの正円形状の池があり、その周辺は遺跡の立地としての条件はよい。そのあたりで発掘をともなった調査を実施する予定でいる。

調査予定の舎衛城内スーラジ=クンド（Suraj-Kund）の周辺

北アリゾナ博物館
——ホピ族のカチーナ人形——

上　村　哲　彦

1．はじめに

カチーナ・ドルズ（ホピ族の言葉で Tithu）はアメリカインディアン・ホピ族（the Hopi）の精霊を表す人形である。この人形はホピの人々にとって、一年の重要な行事と関わりがある。アリゾナ州フラッグスタッフにこの人形を集めた博物館がある。フラッグスタッフはグランドキャニオンに旅する人の基地のような位置にあり、アリゾナには珍らしく緑が多い美しい町である。

わたしが，このカチーナという名前に初めて出会ったのは、サンフランシスコの桑港寺（曹洞宗）で参禅している時であった。昼休みの間、ニューヨークから来ていた女性と日本の祖先崇拝の信仰について話していると、彼女は、それはホピ族のカチーナに似ていると言うのである。そしてカチーナ人形を集めた博物館がフラッグスタッフにあることを教えられ、アメリカでの大学生活にかなり慣れた頃、この博物館を訪れる機会がきた。

2．ホピ族と宗教儀式

ホピ族は北東部アリゾナの切り立った岩山である三つのメサ（台地）の上に住んでいる部族である。その顔立ち体型はほとんど日本人と変わらなく、ひょっとしたら五百羅漢の中に知人の顔を捜すよりずっと血肉の通った親しい顔を、この人たちの中に発見できるかも知れない。ホピの人々はこのメサに何世紀にも渡って、とうもろこし、豆、スクゥオシュを主要な産物として生活してきた。ここで農業することは、霜、雹、突風、突然の出水、穀物を駄目にしてしまう日照りといった自然環境を熟知していなければならない。

ホピ族の伝統的な宗教体系は、こうした農業上の不安定な気候と深く関わっている。ホピの人々は長い年月に渡り、穀物の収穫を確かなものにする年々の儀式を創り上げてきたのである。これは日本の豊作祈願の祭りと同じものであろう。そして、その環境上の問題から儀式の大半は、常に雨ごいに焦点が合っている。例えばホピ族のもうひとつの祭り「蛇の踊り（スネーク・ダンス）」がそうであるように、特別のイニシェーションを受けた男たちの集団によって行われる密教的な祭儀であり、カチーナの祭儀と呼ばれる。

3．カチーナ

カチーナの祭儀は、伝統的なホピ族の宇宙観を表している。彼らが世界を見る時の基本になっているのは、この宇宙が、上部世界と下部世界の二つに分割されていて、上部には生命あるものが住み、下部には精霊が住むといった宇宙観である。様々な出来事は、交互に規則正しくこの二つの世界の間に起こる。例えば、太陽は、昼には上部世界を動き、夜には下部世界を動いて一日の運行をする。同じ手続きによって、太陽は一年の周期を刻む。冬至と夏至の間で、日がだんだん長くなっていくのは、太陽のエネルギーが、上部世界に発芽と成長をもたらす、と考える。これが「夏」と呼ばれる。夏至と冬至の間で日が短くなっていくにつれ、上部世界は「冬」になり、精霊の世界（精神の世界）では「夏」になる。つまり内的な世界が夏となるのである。同様に、人は生まれ、生き、死に、そ

カチーナの季節の一番最初に現われる Soyalkatsina

して精霊の世界に行くのであるが、再生の準備は精霊の世界の役割でもある。死者は精霊の世界に居る間も、社会の一員として行動し続けている。

こうした祖先の精霊（自然界のあらゆるものの精霊はこの中に含まれている）がカチーナである。超自然的な力を持ってカチーナは、生きているものの祈りを神に伝達し、また地上の生命を維持する力を促進してくれるように見えざる力にとりなすのである。ポピにとって生きているものはすべて重要であり、重要なものはすべて生きているのである。どんなものも、その命の差でしか区別できない。あらゆるものはリズムを持って絡み合った蜘蛛の巣のような関係の中で存在している。

冬至から夏至を少し過ぎた頃までの期間がカチーナの季節と呼ばれる。一年の残りは、カチーナが精霊の世界に戻る季節であり、「Nimanの儀式」となる。この儀式はカチーナがNuvatukya'ovi、すなわち、ホピ族の住むメサの南西部にある聖なるサンフランシスコ連峰に帰っていくための儀式である。他にも多くの聖なる山は存在する。

カチーナの種類は多く、それぞれに個性や叫び声、衣装、儀式の歌のスタイル、特有の身振りによって容易に何のカチーナかを判別できる。ほとんどのカチーナは、人間にとって親切な友達である。あるものは滑稽であり、あるものは

Wuyaqtaywa
新しいカチーナ・ドルとして作られたもの

Kowaako

子供を怖がらせる鬼や怪物である。

4．カチーナ・ドルズ

カチーナの霊を形にしたものがカチーナ・ドルズで、ポプラの木の根で彫られたものであり、元来は、初潮をみる前の女の子にカチーナから贈られるものと考えられていた。それは、少女の健康な成長と、成人した暁の子宝を願う贈り物である。最初に贈られる人形は「カチーナの母」（Hiahay'iwuuti）を表し、それは「よき母親」のすべての資質を備えているものと考えられている。普通これらの人形はPowamuyの儀式（豆の踊り）とNimanの儀式に贈られる。

この儀式はホピ族の文化の中にかなり古くから存在していたと考えられている。初期のカチーナ人形は、丁度日本の古代の人型に似た．平板な板に頭と胴のくびれを切り込んだだけのものであったようだ。しかしこの人形も時代と共に観光の土産物になりつつある。それを嘆くホピの人たちも多いと聞く。

こうして現代の白人文明の侵蝕によってもなお、南西部アメリカに居住するホピ族の文化の本質は変らず、彼らの儀式は病気平癒、雨ごい、豊作祈願、神話伝承などの伝統を永遠化しようとするものであり、ながんずく、宇宙との調和の維持である。この儀式の絶対的な意味は、個人の中にある計り知れない宇宙が、広大な外の宇宙と目に見えない関係で繋がっているのだ、といった古くからの前提に根差している。

全体をねじ曲げるものは、部分を歪めるのである。素朴な人形の形の中に全体が確固として息づいているようである。

平成３年度購入資料紹介　黒漆桐文蒔絵行器ほか

高　橋　隆　博

黒漆桐文蒔絵行器

『日本釈名』に「行器（ほかい）　外行也、いはいく也、ゆくと通ず、物を入て、ほかへゆく器也」とあり、また『倭訓栞』に「ほかい　行器をいふ、江次第に外居と書り、足の外のそりたるをいふにや、大外居も見ゆ」とあり、「行器」を「ほかい」と訓んだことがわかる。ただ、『延喜式』や摂関家の家産組織をうかがわせてくれる「執政所抄」、あるいは『今昔物語』では、「行器」ではなく「外居」の字を用いている。

「行器」の使用方だが、『空穂物語』に「きぬきたるおのこ、ゆたんおほいたるだいすえたる、ほかいもたせておもうく」と、『今昔物語』には「知タル人ノ許ニ、飯一盛、湯一提ヲ乞ニ遣リツ、暫時有テ外居ニ飯一盛指入ノ坏具シテ、提ニ湯ナド入レテ持来ヌ」とあるので、「食物」などを入れて運ぶ屋外で用いる器具として使われた。

『春日権現験記絵』や『一遍聖絵伝』をはじめとして、中世の絵巻物には数多くの「行器」が描かれており、ごく日常的に使用されたことがわかる。絵巻物をつぶさに観察すると、かならずしも食物器具としてのみ用いられたばかりでなく、さまざまな物を入れる運搬具であったようである。しかし、絵巻物は内容品の一切を描いていないので、何を入れたものかはこれ以上はわからない。また「行器」はかならず一対が朽（りき・りょく）で肩に担がれているので、これが当時ごく一般的な運搬法であったようである。

なお、絵巻物に描かれるほとんどの「行器」が、いわゆる「曲物」で、そこには加飾文様はほどこされていない。漆塗りや文様をつける「行器」が登場するのは、もう少し後になってからのことであり、おそらく桃山期ごろからであろうか。

さて本作品だが、総体を黒漆塗りとし、いささか外に張り出した四脚を付けた、四角柱形の行器である。蓋の表は、円文の中に大振りな「五七の桐文」を、それぞれ金の平蒔絵であらわしている。蒔絵の技法は、絵梨子地・付け描き・描き割りを駆使しており、さらに左右の桐の花がやや外側にひろがりを見せるなど、典型的な桃山期の特徴を示している。なお、四脚のそれぞれに蒔絵の桐文を三個ずつ配し、脚の底部には金銅素文の脚飾をつける。

本作品にみられる文様・蒔絵技法は桃山期から江戸初期にかけて一時代を画した「高台寺蒔絵」とよばれているもので、その名称はいうまでもなく、京都東山の臨済宗建仁寺派の鷲峰山

黒漆桐文蒔絵行器　高さ37.0cm、径29.0cm

行器の上蓋

高台寺に由来する。高台寺は豊臣秀吉の妻高台院の願望により徳川家康が創建した寺院で、「高台寺蒔絵」とは同寺に伝来した豊太閤夫妻遺愛の蒔絵調度品や霊屋の厨子扉にほどこされる文様・技法に由来する漆芸技法のことである。

幔幕桜金銀蒔絵行厨　高さ32.0cm、径32.5×18.5cm

江戸時代の百科辞典である、寺島良安編著の『和漢三才図会』に「食盒　提盒　俗云佐介知字波古（略）提盒今云提重箱近世製甚精美、三四重層□餅酒肴以可提携者、舟逍遙野遊等、行厨提盒必要之器」とある。「さげじゅう」とは、肴物などの食べ物を入れる「折」（室町期にはこの名称が使われている）を三段・四段と重ねた、いわゆる重箱のことで、これを運ぶところからこの名がある。そして、この重箱に酒器の徳利、取り皿などを加えて、さらに持ち運びを便利にするために把手付の台枠をつけたものが行厨（こうちゅう）である。つまり、肴物入れの重箱や酒器などをコンパクトに組み込み、野外での物見遊山に際して携帯した弁当箱である。提重とか花見弁当ともいわれる。

行厨がいつの頃から使われだしたのかはっきりしない。ただ、外箱に「慶長十三年」(1608)の銘のある「花鳥密陀絵行厨」が現存しているので、少なくともその頃には使用されていたとみるべきであろう。遺品からうかがうに、桃山期のものはきわめて少なく、そのほとんどは江戸期も元禄以降の作である。このことは、画中資料のおいても証明できるところである。なお、「重箱」についてもその出現時期は確定できない。『骨董集』によれば、「重箱は慶長年中、重ある食籠にもとずきて、始めて製造すといへるは、うけがたし、今按るに、重箱は衝重の遺制なるべし」との説を紹介してはいるが、すでに室町期の狂言に「まき絵の重箱に、色々の肴を入れて」とある。

本行厨は、咲きほころぶ桜花と雷文・輪違い文・波文・小葵文幔幕を梨子地・付け描きを駆使した金銀蒔絵であらわしている。人物の一人だに見えないが、幔幕の内では酒宴はなやかであることをすでにして暗示するに充分である。錫の徳利一対と一枚の少し大型の皿と小型の五枚の皿をつける。江戸中期を下らない作品である。

幔幕桜金銀蒔絵行厨　高さ32.0cm、径32.5×18.5cm

竹林七賢金蒔絵硯箱

「竹林の七賢」とは、中国の晋時代に世塵をさけて竹林に会し清談をもっぱらにした七人の隠者、つまり阮籍・嵇康・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戒の称である。淡い竹の色調は深山幽谷を暗示するし、七賢人の姿態は一様ではなく、書き物をめぐっての緊迫した場面を見事にとらえている。衣装の一部と被り物、書き物は螺鈿を用いている。蒔絵は薄肉盛り、付け描きを用い、地は銀梨子地。蓋裏には牡丹に蝶を金蒔絵であらわしている。

竹林七賢金蒔絵硯箱

南京・浡泥国王墓

松浦　章

I

明の永楽六年（1408）八月乙未（二〇日）にボルネオから国王麻那惹加那乃が王妃並びに子弟、陪臣等を引き連れ南京に来朝した．彼等はカリマンタン島から福建に到り，その後，明官吏の手厚い保護を受け南京に到着したのであった。この国王が南京で死去し，永楽帝が荘重に葬っている。その墓地（写真①）が現在南京の南郊に残されている．ここに若干報告してみたい。

II

浡泥国が中国と関係を持つのは宋の時代であるが、明朝との関係は洪武三年（1370）に御史の張敬之等が福建の泉州より使者として浡泥国に赴き、同国の使者が張敬之等に従って明朝に来朝したことに始まる。その後、永楽三年(1405)冬に麻那惹加那乃が来朝し、永楽帝より浡泥国王に封ぜられた。そして三年後の永楽六年（1408）八月に国王麻那惹加那乃自身が再び王妃、子弟、陪臣等一五〇余名を伴っ南京へ来朝したのであった。『明太宗実録』永楽六年八月乙未（二〇日）の条によれば、浡泥国王は金鏤表文を奉じ、龍脳、帽頂、腰帯、片脳、鶴頂、玳瑁、犀角、亀筒、金銀八宝器諸方物を貢納し、永楽帝に朝見した。こうして一ケ月程南京に滞在していた浡泥国王が急逝したのである。

『明太宗実録』永楽六年冬十月乙亥朔の条に浡泥国王の急逝の事情とその葬儀について記している。「浡泥国王麻那惹加那乃以疾、卒於会同館。」とある。どのような病気で死去したかは不明であるが、外国使節等の宿泊所であった会同館で亡くなった。後述の胡広の碑文によれば彼は弱冠二八歳であった。『明太宗実録』は葬儀に関してさらに、

> 上輟朝三日遣官祭之。贈以繒帛，東宮暨親王各遣祭、命工部、具棺槨・明器，葬於安徳門外、樹碑神道、求西南夷人之隷籍中国者守之。立祠於墓、命有司、歳於春秋用少牢祭之、仍賜勅撫慰其子。

とある。永楽帝は三日間の葬祭と、皇太子、親王等にも葬式に参列を命じ、浡泥国王の棺を安徳門外に埋葬させ、墓の保全にも配慮している。

III

浡泥国王墓が発見されたことが報道されたのは1958年６月30日付けの『人民日報』である。同紙に「南京市南郊　発現浡泥国王墓」として新華社、南京28日付けの電報による記事が掲載された。ついで、『文物参考資料』1958年第８期（総96号、８月８日発行）に1958年６月29日付けの『今日新聞』より転載された「南京発現古代浡泥国王的墓葬」が報告された。両記事ともに南京市文物保管委員会が明代の浡泥国王墓を発見したことを伝えている。この墓は俗に「馬回回坎」と呼称されていて、南より北に向かって石馬、石文臣、石羊、石虎、石武将が各一対あって墳丘があることを伝えた。

『人民日報』の記事に触発され中国社会科学院考古研究所の黄盛璋氏が『光明日報』1959年１月22日付け史学150号に「中国和浡泥友好的歴史関係」を発表され中国と浡泥両国の関係史を概観された。

浡泥国王墓の発見に関して本格的に考究されたのはシンガポール・南洋大学の陳育崧教授である。『南洋学報』第16巻第１・２号（1960年）に掲載された陳教授の「明浡泥国王墓的発現」は４頁の短い論文であるが、南京市文物保管委員会が浡泥国王墓発見当時破壊が多く判読困難とした碑文の原文が『明文在』巻七四や『皇明文衡』巻八一に収められている胡広の「浡泥国

写真①　浡泥国王墓

写真③　石武将（東側）　　写真④　亀趺・神道碑

恭順王墓碑」と同一である可能性を指摘された。劉廼和氏も1961年4月23日付けの『光明日報』に「浡泥国王墓碑碑文的発見」を発表され、『明文衡』の胡広の碑文を指摘されている。

IV

浡泥国王墓の所在地について、『大明一統志』巻六、南京、応天府、陵墓に、「浡泥国王墓、在石子岡、王本朝所封、永楽中来朝、卒葬於此。」と記し、また嘉靖年間（1522～1566）刊行の『南畿志』巻五、祠墓、応天府、江寧に「浡泥王墓、在石子岡。」とある。

清代でも『欽定四庫全書』所収の乾隆『江南通志』巻三七、輿地志、江寧府、祠墓に、「浡泥国王墓、在江寧縣石子岡、永楽中来朝、卒賜葬於此。」とあり、また嘉慶十六年（1811）修、光緒六年（1880）刊『重刊江寧府志』巻十、古蹟下にも「浡泥国王墓、在石子岡。永楽中来朝、卒賜葬於此。」などと記している。明、清両代の地方志ともほぼ同様に記されている。

浡泥国王墓の埋葬地は胡広の「浡泥国恭順王墓碑」が詳しく、「是月（永楽六年十月）庚寅（十六日）、以礼葬王于安徳門外之石子岡。」と記している。埋葬された「安徳門外」とある安徳門とは『南畿志』巻一、総志一、南都紀、城闕、都城に、

> 外郭、西北、據山帯江、東南、阻山控野、闕十有六門……南五曰夾岡、鳳臺、馴象、大安徳、小安徳。

とあるように南京城附郭南の大、小安徳門のいずれかを指すものと思われる。『明史』巻四十、地理志一、応天府においても、

> 其外郭、洪武二十三年四月建、周一百八十、門十有六、……南曰上方、夾岡、鳳臺、大馴象、大安徳、小安徳。

とある。上方門は『南畿志』では東に含まれているが、その他はほぼ一致しており、安徳門は南京城附郭の南部分の一門であったことは明らかである。清代の『重刊江寧府志』巻三、輿図、上元江寧両縣図には「安徳」と「小安徳」が見えることから、大安徳門が安徳門を示していると言えるであろう。現在の地名では安徳門外東向花村である（呂武進氏等『南京地名源』江蘇科学技術出版社、1991年8月、459頁）。

現状の浡泥国王墓（写真②）の墓道には石武将（写真③）等の石像が五対ある。さらに墓道より若干東にある亀趺（写真④）上の神道碑は上部が破損しているが、その碑身が上記の南京市文物保管委員会の報告では幅1.09mとほぼ明の三尺五寸に相当し、萬暦『大明会典』巻二〇三、文武官員造墳総例に見える碑身の闊さが「公侯」三尺六寸と「一品」の三尺四寸の間に当る。これと石像等の形式から浡泥国王はほぼ公侯と一品官との中間の規模で埋葬されたと考えられる。

写真2　浡泥国王墓全景

大英博物館日本部門

G・S・ジョンソン

大英博物館には、百年を越える以前から、日本の貴重な古美術、書画、陶磁器、武具等のコレクションがある．しかし、日本部門が設立されたのは，ようやく1987年に至ってのことであった。それまでは、日本関係の所蔵品は東洋部門の管理するところであり、一般公開に際しても、常設展示の大部分は中国関係に当てられ、日本関係は長く臨時の展示用スペースに限られていたのである。

日本部門の新設に当たっては、十分な空間と温湿度調節装置を備えた専用の展示室、研究室および収蔵庫等の施設が強く要望された。これらに関しては、幸い朝日新聞や英国の主要報道機関等による募金活動が成功したこともあって、日本部門の新施設は二年前1990年に完成をみるに至った。

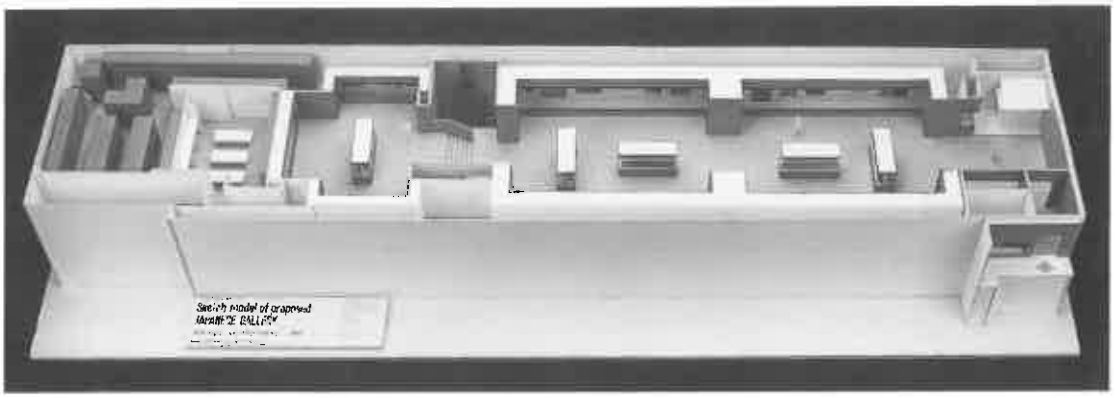
在外研究期間中（1988-89)、筆者は幸い定期的に大英博物館を訪ねることができた。当時は、博物館の北西部に、日本部門の施設建設工事中の足場を望むことができたが、その間、日本部門ローレンス・スミス部長の好意で、建設現場を見学する機会が得られた。床の下塗りが終ったばかりのところで、壁面はコンクリートブロックがむき出しのままであり、天井部は各種配管配線類の工事中であった。しかし、スミス部長は、その段階で実際の完工状態を知悉していた。

大英博物館に日本部門専用の施設を設けることを最初に着想したのは、このスミス部長である。彼は夢を抱くこととその実現を図る力を併せもつ人であったが、日本からの寄金なくしてその夢の実現は困難であることも認識していた。

日本部門所蔵品の調査研究希望者に対しては、二つの簡明かつ重要な規則がある。その一は、調査研究希望対象を明示して予約を行なうことであり、その二は、博物館側にとって知名の人による紹介状を要するということだ。

第一の規則は、研究用スペースが限られており、また専門スタッフの数が十分でなくそのスケジュールも余裕が少いことによる。したがって、調査研究の対象はできるだけ限定することが望ましい。外来者の調査研究に際しては、スタッフが同席することになっている。事前の予約期間にゆとりがあれば、それだけ一そう専門的に便宜を得やすいスタッフの助力を期待できよう。

第二の規則は、所蔵品の保護対策である。所蔵品は、専門的研究者のみならず、学生や収集家などにも参照の機会が与えられている。したがって、紹介状による身元確認が重要なのである。稀にではあるが、所蔵品が盗難に遇うこともあり、それを防ぐためにも身元の確認が求め



第１図　大英博物館日本部門模型　（向かって右より左へ）裏千家茶室、大展示室（第１室および第２室)、コニカ・ギャラリー（階段上)、研究室、収蔵庫（最右端）

られる。

筆者がはじめて大英博物館を訪ねたのは1982年のことで、当時はまだ日本関係所蔵品は東洋部門に会められていた。筆者は、本博物館関係者にもよく知られた学者の紹介状を添え数週間前に予約をした上で、日本の絵本・画布等の調査研究を行なった。研究者用の部屋は非常に広く，入室後は守衛が入って鍵を掛けた。一たん身元確認の後は、入室は比較的容易で、調査研究は続けやすかった。

筆者の所期の目的完了までには数日を要したが、その間、箱やショッピングバッグを抱えて入室してくる人々を見かけることがあった。後で知ったことだが、その人たちは鑑定希望の品を携えてきていたのである。たいていの場合、その品々は、父祖以来何代にもわたって家に伝わったものであり、子孫である現在の持主にとっては、年代や場所その他由来にかかわることが不明のものであった。

筆者が感心したのは、鑑定に当たるスタッフの忍耐と行届いた応答ぶりである。館の規則によると、スタッフは、鑑定品の価格や販売の便宜に関する示唆を与えてはならないことになっている。しかし、ほとんどの鑑定依頼者は、ただ単に家伝の品についての好奇心を満足させたいだけであり、また、たとえば祖父が中国製の壺と思っていたものが、実は日本からの輸入品であることを知って喜んだりするのである。

そのような鑑定依頼は、筆者から見ると、スタッフの研究活動の妨げになるのではないかと思えたのだが、スミス部長によると、これはむしろスタッフの重要な責任であるという。

彼の説明によると、大英博物館は国費によって運営されているとのこと。つまり、所蔵品は納税者によって維持管理され、館員の俸給もまた納税者の負担するところである。だから館員が能う限り利用者の便宜を図るのは当然の義務というわけである。

第2図　コニカ・ギャラリー

本博物館への来訪研究者向けには、各部門それぞれに別個の規則があるため、問合せは直接に訪問希望部門宛に行なうことが必要だ。日本部門ならば日本語でもよいが、なるべく明瞭な字体で書くこと。できればワープロによることが望ましい。

第3図　展示準備中の大展示室（第2室から第1室を望む）

平成３年度調査報告宮城県の遺跡及び博物館施設

角　田　芳　昭

平成３年７月３日より７日迄東北地方における本学所蔵資料の調査を行なった。その記録については前号に発表したが、宮城県のみは誌面の関係で記載できなかったのでここに記録しておきたい。

宮城県は「杜の都」として著名で、伊達政宗公が陸奥62万石の本拠として青葉城を築いて以来、その城下町として発展を続け、東北における行政、経済、学術の中心として発展を続けている。また東に松島、西に蔵王や磐梯吾妻、北に陸中、十和田をひかえ、みちのく観光の基点ともなっている。

本学には全国各地の出土瓦の中に「宮城県多賀城廃寺」の瓦があり、立寄った。多賀城の南東約１ kmの小高い丘の上に寺跡があり、東に塔、西に金堂があり、講堂から延びる築地塀がそれらを囲んでいる。この様式は大宰府の観世音寺に似ており多くの礎石が残っている。本学の瓦は「重弁式蓮花文鐙瓦」で多賀城式重弁蓮華文鐙瓦の10類に分類されたうちの第３類にあたるもので、同類中もっとも瓦当の厚みのあるものである。注目されるのは瓦当面の相対応する蓮弁上に「相」という文字が正字および逆字で陽刻されていることである。

多賀城廃寺跡出土瓦

瓦当面の直径は20.5cm、内区径17.3cmで内区界線と外区素縁との間に幅4.8mmの沈線がまわっている。この種の瓦の使用地点は多賀城廃寺では、塔、金堂、小子房、西倉から出土しており、多賀城の政庁跡からも発見されている。折から東北歴史資料館において企画展「多賀城」が開催されており、30年にわたる発掘調査の成果が展示されていた。同様の瓦が展示されていたのを発見し、この地で蒐収された資料であることを確信した。製作年代については神亀５年（728）以降より天平９年（700）以前ではないか考えられている。

多賀城は多賀城碑によると神亀元年（724）に大野朝臣東人によって多賀城が置かれ、天平宝字６年（762）に藤原恵美朝臣朝獦が修造したと記している。この碑には多くのなぞがあり、その眞偽についての研究論文が多数発表されている。それより推論すると多賀城が設建された折、西門のところへこの碑が建てられたが戦乱により、すぐ土中に埋れて久しく忘れられていたが、江戸初期の万治寛文の頃、土中より発見され、覆堂が建てられ保存された。水戸光圀の建言により藩主伊達網村は碑の整備を行ない今日に見られる如く保存されている。碑文における偽建説の理由とされるところは①碑の外観と彫り方、②碑の文字の書体・書風、③碑文中の里程、④靺鞨国号に関すること、⑤東人と朝獦の官位に関することなど正史との関連において疑問が残ることである。

しかし、近年の発掘調査において新しい事実が続々とあらわれ、また多賀城の時期変遷は碑文に記載内容とほぼ合致していることが立証された。

しかしまだ金石文の内容につき不明な点も多いので、今後の研究検討も必要であろう。

続いて「東北歴史資料館」を見学した。当館は昭和49年開館され、東北地方を中心にした資料の収集展示を行うとともに調査・研究を行ない、その成果を展示し、出版物として公開している。１階の常設展示は東北地方の歴史の大き

多賀城碑覆堂

な流れが理解できるよう時代別に展示され２階は企画展示が行なわれている。特別史跡の「多賀城政庁跡」模型や「多賀城碑」模型なども展示され、理解の一助とされている。発掘調査、研究発表等も活撥で社会教育施設のリーダー格として存在する。

日本三景の一つ「松島」は平安時代から多くの歌に詠まれており、湾内に浮かぶ大小260余の島々、松の緑、碧い海の景観など自然の造形美はいつみても素晴しい。若干の時間があったので五大堂を見物し、政宗公霊廟瑞厳寺へお参りし、境内の五葉松、臥龍梅などを見学した。仙台市内へ戻り、「陸奥國分寺跡」を見学した。国分寺は天平13年（741）聖武天皇の詔により、国分寺及び国分尼寺が諸国に置かれることになり、国毎に僧寺及び尼寺をおき、金光明最勝王経及び法華経を講読せしめ、その功徳によって国土の安泰を願う国家鎮護のための寺院とされた。昭和30年より行なわれている発掘調査により、塔址、南大門、中門、廻廊、金堂、講堂、鐘楼、僧坊などの址が発見され、瓦葺、丹塗の七堂伽藍をもった唐式の大寺院であったことが判明した。寺址は東西２町と推定され、南北はこれより若干狭かったと思われる、南大門、中門、金堂、講堂、僧坊が南北一直線上に並び、塔が金堂の眞東に、鐘楼、経楼が金堂、講堂間の左右にあり、中門、金堂を廻廊が結んで中庭を囲む所謂東大寺式（唐式）伽藍配置を採っていた。武蔵国分寺、佐渡国分寺、出雲国分寺などがこれに似た伽藍配置である。「紫香楽宮址」として史跡に指定されている滋賀県甲賀郡雲井村の寺院址がこの伽藍配置に酷似している。（『宮城県史第１巻』より）いずれにせよ貴重な史跡であり、今後の研究で新しい事実も解明されるであろう。「史跡陸奥國分寺阯」の石柱が建っているのみで、静寂そのものであった。

最後に「仙台市博物館」を見学した。昭和36年10月開館され、61年改装された人文系博物館である。緑の多い周辺とマッチするように２階建である。時代の流れにそって展示テーマが構成され、総合展示室３室のうち第１室は旧石器時代より室町時代まで、第２室は江戸時代、第３室は明治より現代までの資料展示と解説であり、各時代の歴史が一目でわかる立体展示が多い。特に屋根をつけた制札の展示は他館に見はれないもので本学でもこのアイデアを利用させてもらい展示したいと考えている。コレクション展示室においては東北の焼物、土人形、駄菓子と飴売り、また館蔵の絵画、浮世絵などの資料が展示されている。テーマ展示室においては仙台藩の武器、武具を展示し、第２室では支倉常長と東北キリシタン関連資料が展示してある。企画展示室では話題性の多いものをいち早く準

（16ページ上欄へ続く）

多賀城跡政庁推定模型

仙台市博物館展示の一例

第２回（平成３年度）考古学入門講座について

平成２年11月第１回「資料室公開講座」が開講され、多数の受講者の参加があり盛会でありました。アンケートなどにも次回が待遠しい、また春秋２回程度開講してはどうかなどの声があり、運営委員会の議を経て平成３年11月第２回「考古学入門講座」が開講されました。考古学等資料室と事業局の主催のもに、関西大学文化学術振興会が協賛下され、出版課が協力して下さいました。

平成３年11月２日(土)13時30分より100周年記念会館において開講式が行なわれ、森本靖一郎事業局長の司会により開講され、網干善教委員長の挨拶、大西昭男学長、稲野治兵衛理事長の歓迎の挨拶があり、森本局長より文化学術振興会の役員の方々の紹介がありました。講座概要や日程等の説明等があり、午後２時「古墳研究総論」と題し網干善教教授が講演された。第２回目は前期古墳研究の諸問題について田中晋作氏、３回目は中期古墳について泉森皎氏、４回目は後期古墳について勝部明生氏の講演でスライドを使用され、所定の時間も相当オーバーするなど諸々の質問等もあった。５回目は山本彰氏が終末期古墳について講演されました。全期間を通じ平均300名という参加者があり、来年の講座を楽しみにしていると話されたり、ＯＢの方は考古学についての知識が増えた、発掘の現地説明会に行くのが楽しみだとも話されていました。今後も新しい企画で、話題性の多い問題等をとり上げ実施していきたいと考えています。

講演会風景

第２回「考古学入門 講座」

受　講　証

No.

氏名

主催　関西大学考古学等資料室・関西大学事業局
協賛　関西大学文化学術振興会

考古学入門講座概要

日　程	講　　師	講　　演　　要　　旨
11/ 2(土)	関西大学文学部教授 網干　善教	多くの考古学徒が古墳乃至は古墳時代の遺跡の発掘を行い、また研究を行って多大の成果を挙げている。 古墳とは何か、古墳の構造、副葬品、編年、古墳築造の背景などを概観しながら、古墳とその時代についての研究の現状と課題を考えてみたい。
11/ 9(土)	大阪府池田市教育委員会 池田市立歴史民俗資料館主任学芸員 田中　晋作	1）前方後円墳の出現をもって古墳時代のはじまりとする考え方がある。では、前方後円墳とはどのようなものを指し、どのような歴史的意味をもつのか。 2）前期古墳は、時間の流れの中でどのように変遷するのか。三角縁神獣鏡に代表される副葬品や埋葬施設のあり方から考える。
11/16(土)	奈良県教育委員会文化財保存課主幹 泉　森　　皎	古墳時代中期は大変革の時代である。 その時代の特色は、①応神・仁徳陵で代表される巨大古墳の出現、②竪穴式石室に長持型石棺を安置、③甲冑、馬具、陶質土器、金・銀製品、ガラス器の副葬など以上の3点を中心に当時の対外関係を背景に考える必要がある。
11/23(土)	奈良県立橿原考古学研究所研究部長 勝部　明生	奈良斑鳩の藤ノ木古墳は、古墳時代後期を研究する上できわめて重要な問題を提起した。本講では藤ノ木古墳の調査研究を通じて、金銅製馬具、金銅製冠・沓・帯などの用途を明らかにし、6世紀中葉にはわが国に受容されたといわれる仏教伝播の様相を探る。
11/30(土)	大阪府教育委員会文化財保護課技師 山本　　彰	終末期古墳は、古代史の上では飛鳥時代（593年～710年）に対応する時期に築かれている。この時期は日本の古代国家が形成される時期にあたる。この変化は古墳によく表れており、急激な古墳時代の終焉を具体的に検討することにより、国家の形成過程を明らかにしてゆきたい。

記

○日　　時　平成3年11月2日(土)から連続毎週土曜日午後2時から午後4時まで

○開 講 式　平成3年11月2日(土)午後1時30分から開講式を行いますので、直接会場へお越し下さい。

○会　　場　関西大学100周年記念会館(吹田市千里山学舎内)。なお、開講日には考古学等資料室を特別公開しております。(但し、午後12時～午後5時)

○参 加 費　3,000円(5講座分でテキスト代を含みます。)

○定　　員　300名（先着順）

○申 込 み　受講ご希望の方は、添付の振込用紙にて最寄りの郵便局または銀行（別紙口座）から学校法人関西大学あて、参加費をお振り込み下さい

備し随時開催しているとのこと。展示ゾーン以外では情報資料センター、講習室、ギャラリーホール、イベント広場などがあり、市民に利用されるとともに質問や相談に応じている。

またミュージアムシップがあり、カタログ、資料図録、東北地方の民芸品が販売されている。博物館セミナー友の会の育成などもあり、東北地方の博物館関連施設のリーダー的存在である。

資料貸出

資料室規程により次の資料貸出許可が行なわれた。

◎「袈裟襷文銅鐸」（大阪府四条畷市出土）2点
4月6日～6月10日
大阪府立弥生文化博物館「弥生の神々」展へ

◎「甲冑」（末永雅雄先生復元）　1点
◎「勾玉」（島根県飯ノ山横穴出土）　8点
◎「須恵器」（島根県飯ノ山横穴出土）　2点
4月10日
大阪狭山市発行『末永雅雄先生―常歩無限の一生―』に掲載するため写真ネガ貸出

編集後記

第25号をお届けいたします。原稿をお願い至しました諸先生方に感謝申し上げます。

本年3月、加藤一朗先生が定年退職されました。加藤先生には多数ご執筆下され、阡陵の充実発展に寄与下されました。感謝いたします。いつまでもご壮健でご指導賜わりますようお願い申し上げます。

平成2年度より「公開講座」が開催されており、3年度の第2回目も大盛会でありました。特に共催の事業局と協賛の文化学術振興会の皆様が中心となり運営して下さいました。「古墳時代」の講演で、総論（網干善教委員長）に続き前期、中期、後期、終末期と各専門研究者により行なわれ受講者を魅了いたしました。次回からも話題性の多い問題をとり上げ実施されることと思います。

本学に博物館学課程が開講され30周年となり、これを記念して論文集を編集しておりましたが、このたびようやく発行の運びとなりました。教職員、社会教育関連へ勤務されている卒業生の論文35編が収録されています。ご期待下さい。

表紙の写真は**「車輪石」**であり、古墳時代前期より中期にかけての遺物である。石釧、鍬形石と共にその祖形は貝輪である弥生時代のカサガイ製のものが材質、形状に変質していく過程を示すように肋条が放射状に彫込まれている。形は輪郭が卵形をしたものと円形に近いものがある。この名の由来については『雲根志』（木内石亭著）に「其形状丸く式は飯櫃（いびつ）なり。あるひは平にして中厚く端薄し、大さ指渡（さわたし）し3寸、或は5寸、或は8～9寸、色薄く木理ありて、木の化せきに似たり、菊花の如くに彫りて、中に1つの穴あり、今の茶台、盃台の形にして穴のさしわたし2寸ばかり、甚だ稀なるものなり。」と車輪石の説明があり、現在も車輪石の名称が使われている。出土数は一般的には1つの古墳より10数個の検出が限度である。用途は腕輪などの実用的なものではなく、多分に宝器としての性格が強いとされる。本資料は鑑定の結果碧玉で径5.72cmの円形孔で縦長17.9cm、横幅13cm。

〔角田芳昭〕

関西大学考古学等資料室彙報　No.25　平成4年5月31日　発行
関西大学考古学等資料室　編集
ナニワ印刷㈱　印刷